環境と人類ゼミ：War before civilization　　021113／板倉

Chapter4：Imitating the Tiger　forms of combat

P59-1

未開の戦闘形態：かなり多様だが、
形式的な戦争／小規模な急襲／大規模な急襲 or 虐殺　に大別でき、
頻度は小規模な急襲が最も高く、虐殺が最も低い。

P59-2　　BATTLES

・敵との取り決め：敵への宣戦布告と警告。戦闘の場が決められ、了解される。

Ex）Dugum Dani：布告者を敵領域の境界へ送り、戦争を申し込ませる。
→受諾→戦闘の場を告知する。
→拒否→後日出直す

Maring：拒絶されると、布告者たちはそのまま敵領域に侵入し、敵の誰かを殺害して所有物を破壊する。

Kalinga、Nguni、California Indian のいくつかも同様

・戦士は特別な装飾をほどこす。

・罵りと侮辱の応酬が繰り返される。

・未開の戦闘は一般的に、敵同士の槍、弓矢、たいまつのとどく最大範囲のところで列をなして対峙しておこなわれる。

ex）Huli：弓矢の射程距離…最大約 150ﾔｰﾄﾞ、50ﾔｰﾄﾞ内が最も効果的
50～100ﾔｰﾄﾞの距離（比較的効果の少ない距離）で小競り合いをしている

未開の戦闘における事前取り決め、派手な装飾、野次り合い、離れた距離での小競り合い
→儀式的な雰囲気を醸し出している。

P60-1

J.Keegn：「戦争は相互の認可された意志行為を必要とする。
戦争の申し込みを断られるのは、その集団の計画においてひどいﾌﾗｽﾄﾚｰｼｮﾝとなる。」

・戦闘場所…敵対集団両者の活動領域に比べれば明らかに狭い範囲でおこなわれる。
ﾌｧﾋﾞｳｽ流の戦略：土地を明け渡すことで単純に戦闘を避ける持久戦
ex）ﾊﾝﾆﾊﾞﾙ軍に対するﾛｰﾏ軍、ﾅﾎﾟﾚｵﾝ軍に対するﾛｼｱ軍、ｹﾞﾘﾗ戦など

P60-2

・未開の戦闘の様式化された or スポーツ的な性質

ex）Plains Indian：「counting coup」…勇敢で大胆な行為
coup…ﾌﾗﾝｽ語で「大げさに言う」「おだてる」「行為」

…敵ｷｬﾝﾌﾟから馬を奪う。手持ちの武器で敵を殺す。傷ついた仲間を救う。敵集団に一人で乗り込む。
死んだ敵に手や手に持ったもので触れる。生きている敵に触れる。敵を最初に発見する。
→勇者としての戦士の名声に関わる。

P61-1

・これは文明化された概念（軍人の勇気、名誉の報酬）とあまり変わらない。
国家は敵の殺害に対してではなく死のリスクに対して勲章や昇進を与える
counting coup は馬を奪う or 敵に触れるなどの特殊な行為を奨励するが、文明化された慣習では、戦傷者の介抱 or 救助などが奨励される。
ex）古代ｷﾞﾘｼｱにおける奨励：階級秩序を維持する or 敵陣営に一番乗りする
count coup は様式的な慣習であって、戦闘での致死率を緩和するものではない。

P61-2

現代の戦争は、未開の戦争よりも儀式化している場合もある

降伏…個人；手を挙げる。白旗。武器を捨てる。Key ward を叫ぶ。Etc

全体；踊る。使者による白旗。取り決められた砲撃中止。形式的な道具の合図

→適切な儀式によって壊滅的な打撃からまぬがれる

捕虜の交換や捕虜宣誓も 19 世紀まで一般的であった。

ex）第二次世界大戦：連合軍も枢軸国側も攻撃されたうえでの名誉の降伏を望んだ。

ｼｪﾙﾌﾞｰﾙのﾄﾞｲﾂ兵；降伏の口実のために門に砲撃してくれ、とｱﾒﾘｶ兵に頼んだ。

P62-1

国際法→現代戦の儀式的な性質を助長

P62-2

19 世紀末まで象徴物（軍服や軍章）の防御と略奪が重視される

ex）軍服の詰め襟を守るために逃走して戦死した二人の兵士に英国の高い栄誉が与えられた。

皮肉なことに Zulus は彼らの詰め襟に関心はなく、戦場に捨てていた。

→象徴物に対する執着は、Plains Indian の count coups に劣らす様式化され非実用的である

P63-1

軍事関係物の装飾が実用的（迷彩色など）になったのは最近 50 年ほどである。

第２次世界大戦以後、米軍の装飾はおとなしくなったが、逆に未開的とも言える。

Ex）湾岸戦争：米軍 A-10Warthog 爆撃機の機首にはサメの口が描かれていた。

P63-2

現代戦における「罵り合い」：スピーカー、ビラ、ラジオ放送

降伏を促す（普通徒労に終わるが）。心理戦。誇大広告。

Ex）太平洋戦争：日本軍は「Joe DiMaggio はヘボだ！」など癇に障ることを下手な英語で叫んでいた。米軍は英語で汚い言葉を叫んでいた。

P63-3

・一般的に未開の戦争は死傷者が少ないと言われるが、本当か？

図 4-1：部族の戦争と文明国の戦争の死傷者比率

ex）Yokuts：構成員の半分（3 小部族）が殺害された。

Assiniboin raiders（Plains Indians の急襲団）：皆殺しにされた。

→未開の戦闘が文明化された戦闘よりも死傷者の比率が低いという確証はない。

P64-1

図 4-1 に含まれない戦闘のデータ

Cahto と Yuki：1 回目の戦闘から 10 日後に 2 回目の戦闘があり、1 回目と同程度の死傷者が出た。

Potomac 川の戦い（南北戦争）：Gettysburg の戦いから３ヶ月後に勃発。その 10 ヶ月後に Wilderness の戦いが勃発。

…死傷率が低いながらも頻繁に起こる戦闘の「累積効果」に関する議論は６章においておこなう。

P65-1

勝者が敗者の領域内を二次的に荒らす場合がある。

Ex）Maring：600 人のクランのうち、3%が戦闘で死亡し、2%が逃走中に死亡した。

ﾌﾗﾝｽの 1940 年の敗戦：総人口 4200 万人のうち 120 万人以上の兵士が戦死し、84 万人の市民が戦闘後に殺害された。

Tahitian、Fiji、Cauca Valley でも敗者側領域での大量虐殺がおこなわれた。

→戦争において最重要で普遍的なルール：「負けてはならない」

P65-2

部族や語族内の戦争　→関係のある「敵」であるため、戦闘が制限・管理される。

外部集団間の戦争　　→ルールがなく、より悲惨な戦闘になる。

P65-3　RAIDS AND AMBUSHES

急襲・待ち伏せ…女性や子どもが狙われる。

Ex）Cahto と Yuki：黒曜石産地と植物採集テリトリーをめぐる争いに腹を立てていた数人の Yuki が､採集をしていた Cahto の女性 4 人を殺害したのをきっかけに戦争がはじまった。

急襲方法のひとつ：日暮れ頃に敵の家の周りに忍び寄り、壁を槍で突いたり、入り口や煙口に矢を射たり、家に火をつけたりする。

Ex）Chilcotin：厳しい冬に、他部族の小規模で孤立した小集落やｷｬﾝﾌﾟを攻撃して食物を奪った。

The East Cree：たまたま遭遇した Inuit の家族を殺害し、幼児だけ捕虜として捕らえた。

→未開の急襲においては、性別・年齢にかかわらず命の保証はない。

P66-1

無防備な敵を襲うため、急襲による殺傷率は高い。

Ex）Yanomamo：ある集落は 15 ヶ月に 25 回の急襲を受け、集落民の 5%を失った。

Dugum Dani：約 6 ヶ月に 7 回の儀式的な戦争で 2 人が死亡し､9 回の急襲で 7 人が死亡した。

表 2－4：北西 Indian のほとんどが、年に少なくとも 2 回は急襲を受けていた。

British Columbia 諸部族の初期記録：急襲やその他の戦闘が頻繁で持続的だったと思われる。

→未開の戦闘では、最小リスクで敵に大きなダメージを与える急襲・待ち伏せが頻発している。

P66-2

上記の急襲ﾊﾟﾀｰﾝをしめすと考えられる考古学的な痕跡

①犠牲者の墓　②女性の犠牲率が高い

③犠牲者の墓が主要な居住域から離れている　④成人男性は背後から攻撃されている

ex）ﾜｼﾝﾄﾝ中部の孤立した埋葬遺跡はこのﾊﾟﾀｰﾝに符合する：1500 年間（14C）継続している

人骨に残された飛び道具の痕跡→殺害者は部外者

…この地域の民族誌では部族内は平和的と記されているのはおもしろい。

Illinois 中部の墓：A.D.1300 年。264 体中 16%が急襲による殺害

Gebel Sahaba（ｴｼﾞﾌﾟﾄ）：13000 年前。同時埋葬。身体の前面に傷がある。子どもも同様。

…小さな野営地への攻撃で少なくとも 2 世代にわたる。

一般的に暴力による死亡率は高い

→民族誌において急襲は頻繁に起こっており、先史時代にもおこなわれていたと考えられる。

P67-1　MASSACRES

大規模な急襲…敵の集落を囲み、あるいは侵入し、合図とともに手当たり次第に皆殺しをする。

ふつう無差別だが、女性や子どもは成人男性よりも逃げやすい。

Ex）ﾆｭｰｷﾞﾆｱの 1 事例：総人口 300 人の 8%が死亡

1 時間ほどの攻撃で 1000 人の部族同盟の 13%が死亡

ｶﾅﾀﾞ北部：いくつかの Dogrib bnds が Yellowknifes ｷｬﾝﾌﾟの 20%にあたる男性 4 人、女性 13 人、子ども 17 人を殺害した。生き残った人々も近隣の集団に吸収されていった。

Kutchin と Mackenzie Eskimo、Upper Tanana（Nabesna）と Southern Tutchone、Yanomamo なども類例

→平均で総人口の約 10%が殺害されている

…1941 年の米国被害 1300 万人や 1945 年の日本被害 700 万人に匹敵する。

部族内の虐殺は破壊的になる（すでに戦闘や急襲で社会集団が殺害されている場合はとくに）。

P68-1

Ex）Dugum Dani：10、20 年に一度だけ（Sambia が近隣 6 部族を虐殺）あったと思われる。

Yellowknife：最後の大虐殺から 20 年以上おこなわれていない。

→虐殺の頻度の低さを一般化するには不十分なデータである。

植民地支配以前の世代にあたる高齢な informant が提供する民族誌によれば、かつて虐殺は多くの未開集団において非日常的な経験ではなかったと思われる。

P68-2

B.Ferguson：「未開の虐殺は、近代ﾖｰﾛｯﾊﾟなどの文明との接触の結果である。」

→先史時代の虐殺（民族誌よりも悲惨な）を示す考古学的証拠に反している。

Ex）Crow Creek（ｻｳｽﾀﾞｺﾀ）：500 体以上の男性、女性、子どもの人骨。全住居が焼けている。

…殺され、頭皮をはがされ、切断されている

時期：コロンブス上陸の一世紀半前（ca.A.D.1325 年）

集落の防御強化が図られているときに襲撃されている。

被害者率：住居数から総人口を 800 人と推定すると、そのうち約 60%が殺害されている

若い女性の人骨があまりみつからない→誘拐された

動物による scavenging の痕跡→埋葬まで数週間は放置されていた

→一回の襲撃で全滅させられ、二度と居住されることがなかった。

P68-3

Ex）Larson 要塞遺跡（ca.1785 年）：頭皮をはがされ、切断された人骨が、放火された家屋の下からみつかった。

ﾏｽｹｯﾄ銃や鉄鏃のような新しい武器は導入されていないため、西洋文明との接触が虐殺の原因ではない。

→人類学者は Middle Missouri の民族誌に対する誤解を正当化できない。

13 世紀後半の Sand Canyon Pueblo（ｺﾛﾗﾄﾞ南西部）でも類似した虐殺の痕跡がある。

P69-1

G.Milner：先ｺﾛﾝﾋﾞｱの戦争は「急襲の繰り返しが、襲撃による虐殺によってピリオドがうたれる。」

…少なくとも北ｱﾒﾘｶでは考古学、民族誌において部族間の頻繁な急襲と虐殺の証拠がある。

これは、西洋文明接触以前の土着的で「本質的な」パターンである。

P69-2

このような虐殺は、先史西ﾖｰﾛｯﾊﾟの未開集団においても存在した（chap2）

ex）Talheim の殺戮（7000 年前）…文明や国家がいまだ「どこにも展開していない」時代

Roaix の殺戮（ﾌﾗﾝｽ・4000 年前）…最も近い Minoan Crete 文明でも 1000 ﾏｲﾙも離れていた。

両遺跡とも被害者数が、考古学者が推定するその時期の一般的な集落人口に近い。

→ﾖｰﾛｯﾊﾟ新石器時代においても、ｱﾒﾘｶ先史時代と同様、集落を一掃するような大規模襲撃があった。

Chpter5：A Skulking Way of War　primitive warriors versus civilized soldiers

P71-1

文明化された戦争と未開の戦争の違いに関する一般的見解→厳しいビジネス vs ゲーム

…文明の兵士が未開の戦士を打ち負かすという毎回の観察に支えられた推測

ﾖｰﾛｯﾊﾟ文明が世界中に広がったのは事実だが、それが戦力の結果かどうかは明らかでない。

実際、特殊兵器や軍事規律、軍事科学をもってしても、文明の兵士は多数戦死している。

P71-2

文明 vs 未開の戦争史：開地での戦闘では未開が有利

P72-1

ﾛｰﾏとｹﾙﾄ・ｹﾞﾙﾏﾝの戦争：Sabinus の援軍（54B.C.)、Varus の 3 軍団（A.D.9）は大敗した。

ﾌﾞﾘﾃﾝ島の未開集団による急襲や待ち伏せはﾛｰﾏ軍にとって厄介だった。

P72-2

ｳﾞｧｲｷﾝｸﾞ vs 北米先住民：ｲﾝｸﾞﾗﾝﾄﾞ侵攻など中世ﾖｰﾛｯﾊﾟにおいて勇猛ははせたｳﾞｧｲｷﾝｸﾞが大敗した。

ｳﾞｧｲｷﾝｸﾞは Skraeling（北米先住民を指す古代ｽｶﾝｼﾞﾅﾋﾞｱ語）の弓と fling whoopie cushion（竿の先につけられた袋がﾎｰﾎｰという恐ろしい音を出す）によって戦意を喪失させられ大敗した。

Skraeling の不名誉な敗北は、ｳﾞｧｲｷﾝｸﾞ軍の女性が胸をはだけたのに驚き、剣で斬りつけられたときだけだった。

S.E.Morison：「Skraeling の自由自在に急襲する能力が鍵となった。」

P72-3

19 世紀までﾖｰﾛｯﾊﾟ諸国はｱﾌﾘｶ沿岸部までしか進出できなかった。

Ex）ﾓｻﾞﾝﾋﾞｰｸﾞを占拠していたﾎﾟﾙﾄｶﾞﾙ：本拠地を離れた小部隊はすぐに先住民によって壊滅させられたため、17 世紀中には内陸部へ進出できなかった。

P72-4

ｱﾒﾘｶ先住民戦争（19 世紀）

ex）Little Bighorn の戦い：Custer 大佐の部隊（200 人）は Sioux と Cheyenne の戦士団（1800 人）によって捕らえられ、壊滅した。

Reno 少佐と Benteen 大尉の部隊（400 人）は小さな丘に要塞をかまえて、生き延びた。

…北からの食物や牧草、援軍の補給があったため、ｲﾝﾃﾞｨｱﾝは包囲攻撃をあきらめた。

P73-1

包囲戦を耐えることはｲﾝﾃﾞｨｱﾝ側でも可能だった。

Ex)50 人の Modoc 戦士は Lava Beds の自然要塞に立てこもり､5 ヶ月近くｱﾒﾘｶ軍の砲撃に耐えた。

…彼らの降伏の原因は、内紛と水の不足だった。

ｲﾝﾃﾞｨｱﾝが野戦で負けるのは、大勢のｱﾒﾘｶ騎兵隊によって集落を急襲されたときだけだった。

…両者の兵数が同じであれば勝算は両者にあった。文明側の戦術的な優位はとくにみられない。

しかし、数で勝るｲﾝﾃﾞｨｱﾝが負ける場合がある。

→兵站、大砲、軍事以外の技術（ﾄﾝﾈﾙや橋の建設）などの点で、包囲戦では文明側が有利であった。

P73-2

Zulu 戦争（1879）

ﾗｲﾌﾙ、大砲、ｶﾞﾄﾘﾝｸﾞ銃で武装したｲｷﾞﾘｽ軍は、槍を持った Zulu に野戦で何度か完敗した。

Rorke's Drift の戦い：要塞を背にした 140 人のｲｷﾞﾘｽ軍が 4000 人の Zulu（年寄りと栄養不良の者ばかりだったが）相手に 2 日間もちこたえた。

Ulundi の最終戦：榴散弾とｶﾞﾄﾘﾝｸﾞ銃で武装したｲｷﾞﾘｽの大軍が、多勢であるが戦意喪失した Zulu を野戦で唯一大敗させた。

P74-1

同様の例

ﾌﾗﾝｽ軍と Tuareg（1890 年代、ｻﾊﾗ地域）

ﾄﾞｲﾂ軍と Hehe（1891－1898、ﾀﾝｶﾞﾆｰｶ（東ｱﾌﾘｶ、現ﾀﾝｻﾞﾆｱ））

ﾄﾞｲﾂ軍と Hereros、Nama（1904－1907、南西ｱﾌﾘｶ）

→文明と未開では、戦略的な差はなく、要塞や兵力の面で文明が持久的に有利なだけである。

P74-2

未開的な戦略を文明側も適用するようになった。

…小規模で機動力のある部隊。大砲をあきらめ軽く小さな武器を使う。

拡散した攻撃形態と小規模の衝突。待ち伏せ、急襲、集落の急襲。

経済的基幹施設の破壊。消耗戦、文明的な兵站。先住民を抜擢し補助を受ける。

→文明的な軍事技術だけでは勝てないばかりか、他の未開集団の協力も必要とする場合もある。

P74-3

ｲﾝﾃﾞｨｱﾝ戦争史家：「ｲﾝﾃﾞｨｱﾝ／ﾖｰﾛｯﾊﾟの関係は、軍事教官／見習いの関係であった。」

「ｲﾝﾃﾞｨｱﾝとのはじめての戦争で、神はﾖｰﾛｯﾊﾟ様式の軍事力の空虚さをお示しになった。今、我々は忍び寄るという戦術を学ぶことができて幸いである。」

→忍び寄りの戦術を学んだ前線部隊は、正規軍より効果的に未開集団と戦うことができた。

軍事的に「部族化された」移民軍がﾖｰﾛｯﾊﾟ正規軍と戦ったとき（ｱﾒﾘｶ独立戦争やｱﾝｸﾞﾛ･ﾌﾞｰﾙ戦争）、彼らはかなりタフになっており、正規軍相手に不足を感じていた。

P75-1

戦争に勝つための本質的要素

…敵を殺す、敵の本質的資源を奪うｏｒ破壊する、敵の不安や恐怖を誘引する

→文明側は運搬技術と農業生産を基礎にした高度な兵站術がゆえに未開集団よりも優位であった。

P75-2

Plains へのｱﾒﾘｶの軍事行動

1865 年：Pope 将軍は列車で大軍を送る途中、Plains に一掃された。

…文明側の出征の多くは、部隊の輸送に失敗し、敵の急襲や破壊を悪化させるだけだった。

しかし、大勢の保安官を設置して数年間の平定統治がなされた。

1870 年代はじめ：怒った Plains の抵抗が頂点に達したため、ｱﾒﾘｶは暴力的に彼らを制圧した。

1876 年秋・冬：Sioux、Cheyenne を制圧

…ｶﾅﾀﾞに逃れた者以外は、特別保留地に移され、彼らの主要資源であったﾊﾞｲｿﾝが駆除された。

P76-1

Apache bands：ｽﾍﾟｲﾝ、ﾒｷｼｺ、ｱﾒﾘｶに対する 3 世紀間の抵抗

…1870 年代～80 年代はじめ：おもに先住民（とくに Apache）で構成された小規模な機動部隊（車でなくラバを使用）が Apache bands のｷｬﾝﾌﾟを襲撃し、制圧した。

→西洋の出征における成功は、文明の資源に保証されつつ未開の戦法を採用したためであった。

P76-2

文明の未開への軍事行動が成功しない例もある。

ﾛｰﾏはｹﾙﾄに対して 2 世紀間、強大なﾊﾟﾙﾃｨｱ帝国に対するのと同等の警戒をはらい続けた。

ｱﾙﾌﾟｽの諸部族、北ｱﾌﾘｶの遊牧民もﾛｰﾏを苦しめた。

P77-1

ﾉﾙｳｪｰ人のｳﾞｨﾝﾗﾝﾄﾞやｸﾞﾘｰﾝﾗﾝﾄﾞにおける悲運は、未開に対する文明の軍事的優位の考えを揺るがす。

…ｸﾞﾘｰﾝﾗﾝﾄﾞでは中世ｳﾞｧｲｷﾝｸﾞの敗北から 3 世紀後、Inuit がﾉﾙｳｪｰ人集落を侵略・破壊したという証拠がある。

（ﾉﾙｳｪｰ人の記録、Inuit の伝承、考古資料）

P77-2

ｶﾅﾘｱ諸島の Gaunche：木槍と投石のみで、ﾌﾗﾝｽ・ﾎﾟﾙﾄｶﾞﾙ・ｽﾍﾟｲﾝに 1 世紀半近く抵抗し続けた。

…それに対して、より文明化したｱｽﾃｶやｲﾝｶは数十日でｽﾍﾟｲﾝ人に滅ぼされた。

熱帯南ｱﾒﾘｶの諸部族：多くのｲﾝｶ、ｽﾍﾟｲﾝ、ﾎﾟﾙﾄｶﾞﾙの部隊が全滅させられた。

P77-3

Pawnees：ﾆｭｰ･ﾒｷｼｺから出征したｽﾍﾟｲﾝ軍を一掃した。

Seminoles：完全にはｱﾒﾘｶ軍に侵略されなかった。第二次大戦の徴兵も免除を主張した。

Sioux と Cheynne：Bozeman 道と Powder 川流域の通行を認められた。

P78-1

A.Crosby：ﾖｰﾛｯﾊﾟの侵略者は「見えないが強力な同盟者」に助けられた。

…ｳｨﾙｽ、ﾊﾞｸﾃﾘｱ、種子植物、哺乳動物→生態系の変容、先住民の病死、伝統経済の混乱

ﾊｼｶ、ｲﾝﾌﾙｴﾝｻﾞ、（とくに）天然痘による死は、兵器による死よりも多かった。

Ex）ｽﾍﾟｲﾝ侵攻による死者は 10 万人→その後 10 年で 400 万～800 万人以上の中央ﾒｷｼｺ人が病死

ﾛｼｱはｼﾍﾞﾘｱの Yukaghir を制圧するために、天然痘ｳｨﾙｽの入った箱を彼らに送りつけたらしい。

P78-2

ｳｨﾙｽの抗体を持った地域では侵略がすすまなかった。

文明の現代薬、公衆衛生、汽船、連射ﾗｲﾌﾙ、ﾏｼﾝｶﾞﾝ

→健康、兵站、火器力で未開集団を上回った。

P79-1

未開の戦士は、しばしば文明の兵士よりも速やかに、文明兵器の軍事的潜在力の真価を引き出した。

Ex）ﾆｭｰ･ｲﾝｸﾞﾗﾝﾄﾞの先住民はﾏｽｹｯﾄ銃よりもﾌﾘﾝﾄ銃を好んで使い、戦闘における攻撃力を上げ、前線の被害を低く抑えた。

Eipo（ﾆｭｰｷﾞﾆｱ）の部族長が、民族誌家の乗ってきた飛行機を見て、すぐに「大きな石を敵の集落の上に落としたいから乗せてくれ」と頼んだ。

→文明国よりも先に、爆撃機としての航空機の軍事的価値を正しく理解していた。

P79-2

未開の戦術の典型は、現代のコンテクストにおいて「ｹﾞﾘﾗ戦」と呼ばれている。

ｹﾞﾘﾗの壊滅は単純な戦術ではほとんど不可能であり、政治的・経済的方法を必要とする。

P80-1

ｱﾒﾘｶ兵は、部族の急襲団とｹﾞﾘﾗの類似に気付き、自軍の拠点ｷｬﾝﾌﾟを「Fort Apaches」と名付け、ﾍﾞﾄｺﾝの領地は「Indian country」と呼んだ。

ソ連のｱﾌｶﾞﾆｽﾀﾝ侵攻においても、未開集団の戦争とｹﾞﾘﾗ戦とのつながりが直接的だった。

ｹﾞﾘﾗ戦は、破壊的で、持続的で、ｺｽﾄがかかり、死者も多くなる。

→未開の戦争が取るに足らないとはみなせない。

P80-2

ｹﾞﾘﾗ戦の成功例

ex）「ｽﾍﾟｲﾝの潰瘍」…ﾅﾎﾟﾚｵﾝも制圧できなかった。

ﾒｷｼｺの Juaristas：Maximilian 軍（おもにﾌﾗﾝｽ人）を負かした。

…20 世紀においてはｹﾞﾘﾗの勝利するｹｰｽが多い（註 29）。

→敗北するｹﾞﾘﾗのほとんどは、経済政策によって兵站援助を押さえられている。

P80-3

・戦術、組織、規律などの文明的な軍事技術は戦闘での勝利に焦点を合わせているが、
未開集団やｹﾞﾘﾗはすべてにおける（とくに戦争における）勝利に専念している。

・未開の戦争は数世代にもわたる長期戦になるが、
文明の戦争は「一発 KO」を狙っている。

・文明の軍事技術は文明国相手の戦争では有効である。（ex）18，19 世紀のﾖｰﾛｯﾊﾟとｱｼﾞｱの戦争

・しかし、第二次大戦ではﾄﾞｲﾂの卓越した兵器や戦術と日本の自殺的な勇気や厳しい規律が、同盟国側の圧倒的な兵力と工業生産力によって玉砕された。
→「優れた」（文明化された）軍事技術、鋭気、規律を
大きな兵力や強力な経済力の代用品とみなすことは正常でない。

P81-1

・以上のような戦争の通文化的調査は、戦術的な兵士数や基地の優位、戦略的な大きな人口や効果的な兵站が勝利の鍵であることを示している。

・実際は、未開の戦術のほうが優れていた。
なぜならば、文明の軍隊はとてつもない兵器、兵力、供給力を持ちながらも、未開の戦術の採用を余儀なくされたからである。

・ﾌﾗﾝｽとｱﾒﾘｶは最近 20 年間でも東南ｱｼﾞｱのｹﾞﾘﾗを制圧できなかった。
→しかし、湾岸戦争ではわずか 3 ヶ月で、世界で最も巨大で重装備な型にはまった軍隊のひとつであるｲﾗｸ軍を粉砕した。
…300 年近くも文明国に抵抗した Apaches とは対照的である。